地域社会生活の担い手育成の方法に関する研究

—地域社会における青少年期の経験の重要性—

Way of Raising Successors of Community

Importance of Experience in Community in Childhood and Youth

井橋朋子* 藍澤宏** 菅原麻衣子**

Tomoko IHASHI* Hiroshi AIZAWA** Maiko SUGAWARA**

(*東京工業大学大学院 **東京工業大学教育環境創造研究センター)

(*Tokyo Institute of Technology **Research Center for Educational Facilities, Tokyo Institute of Technology)

I 研究の背景と目的

農山村地域では、一時に比べ若者の流出傾向は鈍化しているものの、少子高齢化の進行により、担い手不足は依然深刻な問題となっている。

しかし、近年こうした状況に対し、故郷の村おこしや産業おこしに励む若者が各地でみられ始めている。こうした若い世代が地域社会を活気づけることにより、地域社会は社会変化に適応しながら維持発展していくことが可能となる。居住地選択の自由度が進む現代において、若い担い手の中には、地域に住み続けてきた者も一度地域を出てから戻ってきた者もいるが、どちらにしても、生まれ育った地域を生活の場として選択した結果である。その背景には、家や地域の状況を含め様々な事情があるものの、総体としての価値基準を個々人が持っていると考えられる。よって、若い世代が地域に対して持つ価値基準を明らかにし、その形成過程を捉えることによって、長期的な視点に立った担い手の育成を目指す必要がある。

そこで、着目すべき事の一つに、地域における青少年期の経験が挙げられる。祭りや子供行事、神社や道路の掃除といった一つ一つの経験は些細であるが、地域を知る第一歩としての役割を持つ。

よって、本研究では、農山村地域に居住する若い世代が、地域社会に見出している価値を明らかにし、同時に青少年期に地域で経験した事との関連性をみることによって、地域に対する価値観が形成される過程を捉える。この一連の流れを通し

て、今後の地域社会における担い手を育成する方法を示すことを研究の目的とする。

II 研究の方法

まず、現在の若い担い手が地域に対して持つ価値観の特徴を捉え、次に、その価値観が形成された背景として、現在おかれている立場と、青少年期に地域で経験したことに着目し、価値観との関連性を明らかにする。価値観は、次世代へ伝え残そうとする姿勢を通して間接的に把握する。最後に、個々人の経験に対する考え方の基になる視点を詳しく探ることによって、今後の地域社会の担い手育成の方法の一端を示す(図1)。

また、地域社会における経済的基盤は重要であり、その担い手確保も課題であるが、個別的な背景の影響があること、及び拠点確保が重要であるという視点に立ち、本研究では社会生活の側面に特化して考察を進めることとする。

具体的な項目設定は以下の通りである。

第一に、地域社会の中で子供が育つ場として、暮らしの基本を学ぶ《家》、互助関係を学ぶ《近隣》、共同体における役割を学ぶ《地域》を想定した。詳細な項目としては、《地域》では、その構成要素として[環境][文化][安全][組織]の4側面から①環境管理、②農環境整備、③祭り、④祭りの準備、⑤治安活動、⑥防災活動、⑦子供の行事、⑧地域組織活動、⑨地域組織運営の9項目、《近隣》では[伝統][教育]の側面から⑩近隣での

行事, ⑪節句や就学の祝い, ⑫子供のしつけ, ⑬生活の知恵や昔話の語り継ぎ, 《家》では地域を知る一端として⑭近所とのつき合い, [伝統]として⑮郷土料理の伝承, ⑯盆や正月の支度, の計16項目を設定した。各項目について, 次世代に伝えていく事として【必要ない】, 【体験させたい: 意向】, 【体験させている/させた: 実践】の3段階で捉えた。第二に, 現在の若い担い手が青少年期に地域で経験したことについて, 上記①~⑯の16項目に加え, 《家》で教える暮らしの基本である⑰住まいの保全, ⑱家業の手伝いの2項目を設定した。各項目について, 経験の有無とそれに対する当時の意見を【+: 楽しい, やりがいがある】【-: 面倒だ, わずらわしい】の2方向で捉えた。

最後に, 経験の各項目に対しての視点として, それぞれに見出す意味をⅠ. 知識の習得, Ⅱ. 役割の自覚, Ⅲ. 周囲との協調, Ⅳ. 次世代への継承の4段階に設定し, Ⅰ→Ⅱ: 責任の自覚, Ⅱ→Ⅲ: 周囲への視野の広がり, Ⅲ→Ⅳ: 次世代への関心の広がり, という発展性を捉える。

また, 地域に対する価値観を捉える上で, 個々人の家, 地域, 社会における立場を考慮するため, 年齢・居住地域・家族構成・地区外での居住経験・兄弟の中での立場による違いも検証した。

調査対象地は, 少子高齢化が著しい中山間農業地域でありながら, 若い世代の活躍もみられ, また中心部から山間部まで多様な地域性を含んでいる愛媛県K町O地区を選定した。調査方法は, 将来地域運営の中核を担う20代から40代の夫婦に対するアンケート調査を行った(表1)。

Ⅲ 若い担い手が持つ地域に対する価値観

次世代への継承状況をみることにより, 現在の若い担い手が持つ地域に対する価値観を捉える。

まず, 全体の傾向から各項目の特徴を捉える(図2)。(1)環境管理, (3)祭り, (7)子供の行事, (14)近所とのつき合いは, 6割以上が【実践】しており, O地区において最も重要な地域社会経験として認識されていることを示す。一方で, (4)祭りの準備, (6)防災, (8)組織活動, (13)昔話の語り継ぎ

図1 研究の方法

表1 調査概要

アンケート調査概要			
調査対象地	愛媛県K町O地区(人口3707人, 高齢化率46.1%, 農家率39.9%)		
調査対象者	20~40代の世帯主もしくはその妻		
	配布数: 167票	回答率: 41.3%	有効票数: 69票
調査内容	○調査対象者の属性(年齢, 職業, 居住歴, 家族構成, 兄弟関係) ○青少年期に地域で経験したこと, 当時の感想 ○青少年期に地域で経験したことに対する現在の考 ○子供にさせていること, させたいこと		

調査地概要

<K町O地区>

	中心	周辺	山間	全体
人口構成				
0~19歳	17.0%	17.0%	11.6%	14.8%
20~59歳	41.8%	37.7%	36.0%	38.3%
60歳~	41.2%	45.3%	52.4%	46.9%
産業構成				
第1次	11.3%	20.8%	27.5%	20.5%
第2次	28.8%	44.8%	40.4%	37.8%
第3次	53.1%	29.5%	28.3%	36.6%
公務	6.8%	4.8%	3.9%	5.1%
農家率	19.8%	45.6%	56.0%	42.2%

調査対象者の概要

年齢	性別	職業	家族構成	居住地域	地区外居住歴
20~24歳	1男	60農林業	5核家族	35中心	18なし
25~29歳	5女	8自営業	12拡大家族	29周辺	264年未満
30~34歳	6不明	1会社員	26夫婦+親	3山間	185~9年
35~39歳	11	公務員	12夫婦のみ	1不明	710~14年
40~44歳	23	パート	6不明	1	15~19年
45~49歳	20	その他	7		20年以上
不明	3	不明	1

図2 地域に対する価値観の概要

は、重要性が高く認識されているが、【実践】の割合は低い。これは、経験する年齢まで子供が至っていないことや、昔体験を話す役割である年齢に大人が至っていないことなど、個々人のライフステージの影響が大きい。また、⑩近隣での行事、⑪節句等の祝い、⑫子供のしつけ、⑮郷土料理、⑯年中行事の支度でも、重要性が高く認識されているものの【実践】の割合は半数程度となっているが、これらは子供や親の年齢が特に限定されないことから、近隣や家で実践しうる関係があるかどうかの影響している。また、②農環境整備、⑤治安、⑨組織活動は、必要性に対する認識が低く、個々人の意識の差が表れている。

以上より、項目の特徴として、全体的に実践している事項、意識が高いものの家や地域の状況によって実践していない事項、必要性が認識されていない事項の大きく3つの傾向が得られた。

次に、項目間の関係性を明らかにするため、16項目各3段階、計48の変数に対し、分析単位を個人として数量化Ⅲ類を用いて構造化する(図3)。

I-II軸のカテゴリープロット図において、原点と【必要なし】【意向】【実践】の3変数との位置関係から、各項目は4タイプに分類できる。

【実践】が原点に近い①環境管理、③祭り、⑦子供の行事、⑭近隣との付き合い、【実践】と【意向】が原点に近い⑪節句等の祝い、⑫子供のしつけ、⑬昔話の語り継ぎ、3変数が原点からほぼ同距離にある④祭り準備、⑥防災、⑩近隣での行事、⑯年中行事の支度、【必要なし】と【意向】が原点に近い②農環境整備、⑤治安、⑧組織活動、⑨組織運営、⑮郷土料理である。原点に近い程回答者が多いことから、後述のタイプにある項目ほどその重要性が認識されにくい項目といえる。

さらに、個々人の地域社会に対する価値観の特徴を捉えるため、数量化Ⅲ類の得点値をもとに調査対象者をクラスター分析ウォード法によりA1からA6の6類型に分類した(図4)。

カテゴリープロットより、I軸のマイナス方向にいく程継承への積極性が高くなることから、A2が最も積極的な意識を持つタイプといえる。さらに、【意向】の方向へ広がるA1→A3は、意向は全体にあるものの実践が少なくなっていく段

図3 継承姿勢に関するカテゴリープロット

(参考) 家族構成と他属性との関係

拡大家族と核家族では、その居住地域と年齢に差異がみられるが、これは核家族化の進行を示す結果とみられる。

	年齢	居住地域	地区外居住歴
拡大家族	■ 39歳 ■ 40~44歳 ■ 45~49歳 ■ 不明	■ 中心 ■ 周辺 ■ 山間 ■ その他	■ なし ■ 4年未満 ■ 5~9年 ■ 10~14年 ■ 15~19年 ■ 20年以上
核家族			

図4 継承姿勢による個人類型と家族構成との関係

階であり、【必要なし】の方向へ広がるA5→A4は、意向自体が特定の分野に偏っていく段階として捉えられる。

これらの類型と個々人が置かれている立場との関係をみる(図5)。家族構成をみると、A3、A1に核家族世帯が多い一方で、A5、A2には拡大家族世帯が多い。このことから、前述の2つの段階性は家族構成の違いとの関連が強いと予想される。核家族世帯が多いA1・A3の方が、全体に意向が高いことは、核家族の方が世帯主としての自覚を早くから認識することを示していると考えられる。さらに、年齢と居住地域をみると、A3は39歳以下の若い世代や中心部居住者が多い。一方でA2・A5は、40代以降の壮年層世代、周辺・山間部居住者の割合が高い。さらに、A5は他の地域で長く居住していた人が多いが、最も意識が高いA2は組織経験が豊富な人が多く、地域を牽引する役割を担っている人物であると推測される。

以上より、次世代への継承姿勢からみた地域に対する価値観は、子育ての環境を示す家族構成や地域性、また個々人のライフステージを示す年齢により段階的に変化することが捉えられた。

IV 青少年期の経験と価値観との関連性

前章で捉えた地域に対する価値観と、青少年期の経験との関連性を捉える。

まず、青少年期の経験の特徴を捉える(図6)。①環境管理、③祭り、⑦子供の行事、⑪節句等の祝い、⑫子供のしつけ、⑬昔話の語り継ぎは、多くの人が経験し、かつ「+」の意見が多いことから、青少年期に最も馴染みやすい基本的な経験といえる。一方、②農環境整備、④祭り準備、⑧組織活動、⑨組織運営といった地域共同作業に対しては「-」の意見がみられ、家での子供のしつけの一環である⑭～⑯は「-」の意見の割合が高い。このことから、青少年期の経験には、子供が馴染みやすい事柄と、大人から言われて仕方なくやる事柄の両方があることが明らかとなった。また、⑭近所とのつき合い、⑰家屋の手入れ、⑱家業の手伝いという家での子供の経験は、「-」の意見が多い受身の経験であるものの、多くの人が経験しており、地域で行う①③⑦と並んで青少年期の基本的な経験として位置づけられる。

図5 個人類型と置かれている立場との関係

図6 青少年期の経験の概要

図7 価値観と青少年期の経験との関係

次に、青少年期の経験と現在の価値認識との関係を捉えるため、前章で用いた継承姿勢の16項目と青少年期の経験18項目との項目ごとの関係を見る(図7)。同じ内容の項目同士よりも、異なる内容の項目間の方が高い関連性がみられた。中でも、価値観の多くの項目と高い関連性がみられる経験は、②農環境整備、⑤治安、⑧組織活動、⑨組織運営であり、これらは地域に対する価値観の形成に影響を及ぼす経験と位置づけられる。しかし、前章の分析結果より重要性が認識されておらず、見直す必要があるといえる。また、⑭近所とのつき合い、⑮郷土料理、⑯年中行事の支度といった家での経験は⑧組織活動との関連が強く、家や近隣での経験は、地域運営に対する価値観の形成に影響があることを示す。

さらに、前章で捉えた価値観の類型ごとに、青少年期の経験をみる(図8)。まず、①環境管理、③祭り、⑦子供の行事、⑫子供のしつけ、⑬昔話の語り継ぎ、⑭住まいの保全是、類型による差がなく、誰もが共通して経験する事柄といえる。

一方で、類型により差がある項目もみられた。価値認識の最も高いA2に多いのが、④祭りの準備、⑤治安、⑥防災、⑩近隣での行事、⑪節句等の祝い、⑮郷土料理、⑯年中行事の支度、⑱家業の手伝いの経験であり、青少年期に、地域の裏方に関わる経験や、近隣や家での伝統に触れる経験をしたことが現在の価値認識の高さに影響しているといえる。また、地域のこと全般に意識の高いA3・A1・A2に⑧組織活動、⑨組織運営、⑭近所とのつき合いの経験が多いことから、地域や近隣で人との協働関係を持つ経験は地域全体へと意識を広めるきっかけになるといえる。また、①環境管理、⑧組織活動に対しては、20代～30代前半の多いA3・A1で当時<一>の意見を持っていた者が多い。これは、少子化の進行によって一人一人にかかる負担が増したためと類推される。しかし、A2やA1・A3は当時<一>の意見を持っていた項目に対して、現在は価値を認識しており、時間の経過によって重要性が再認識されていることを示す。以上より、個々人の価値観の持ち方には、青少年期に経験した内容が影響していることが捉えられた。

図8 類型別にみた青少年期の経験

図9 青少年期の経験に見出している意味

V 今後の地域社会生活の担い手育成

3章で行った類型化より、価値観の段階性が核家族世帯と拡大家族世帯という2つの家族形態によって異なることが示された。そこで、この2つの段階性の相違点を明らかにするため、家族構成の違いに着目しながら、青少年期の経験に対して現在見出している意味をみる。これにより、地域社会に対する視点を明らかにする(図9)。

項目全体を通して、核家族世帯の多いA1, A3はⅠ.知識の習得やⅡ.役割の自覚といった個人が身につけるべき基本的な事項を意識しているが、拡大家族世帯の多いA5, A4はⅢ.周囲との協調, Ⅳ.次世代への継承といった、個人から集団、また将来へと広い視点から経験を評価している。このことから、拡大家族のように多様な世代間関係が家の中にあることは、地域での経験に見出す価値を広めることにつながるといえる。よって、今後の地域社会の担い手を積極的に育成していくためには、拡大家族にみられる様な身近にある世代間での継承関係を地域社会の中でも築いていくことで、核家族にも付与していくことが重要といえる。その一つの方法として、近年増加する高齢者の核家族世帯が若い核家族を支えていく体制の検討を提案する。

VI まとめ

○地区を対象とした分析から、今後の地域社会の担い手育成に関して得られた知見をまとめる。

1) 地域社会に対する価値認識度：地域社会に対する認識は、まず①環境管理、③祭り、⑦子供の行事、④近所とのつき合いが最も基本的な事項として全体に理解されており、その次に、近隣での教育や、行事の準備等の裏方に関わる事項、最後に、地域の運営という根幹に関わる事項、と段階的に理解されていくことが得られた。

また、このような内容の発展に伴い、個人々の価値認識も段階的に進んでいき、家族構成の状況や地域性、また個人々のライフステージに応じて異なることが捉えられた。

2) 青少年期の経験が価値観に及ぼす影響：現在の価値認識に関連性の深い経験として、②農環境整備、⑤治安、⑧組織活動、⑨組織運営が抽出

された。これらは、都市化の進行により経験する機会が減少しつつあるが、本研究の分析より、地域社会に対する理解を深める経験としての潜在的な重要性が導かれた。また、居住地選択の基準となる環境面や安全面を維持していくための知識が蓄積されてきた事項でもあることから、このような経験の価値を再度見直すことが重要である。

また、地域社会における経験の中には、青少年にとっては消極的に捉えられる面もあるが、後に重要性が再認識されることもあるため、長期的視野を持って経験させていく必要がある。

3) 今後の地域社会の担い手育成における課題：家族構成の違いに着目した考察により、身近な世代間関係における日常的な継承行為が重要であるという知見が得られた。これまでの地域社会においては、家を中心に行われてきた世代循環のシステムであるが、今後は、近隣や地域における世代間関係の中でも積極的に築いていくことが、今後の地域社会の担い手育成を促すと考えられる。

参考文献

- 1) 鈴木榮太郎著作集Ⅰ：鈴木榮太郎，未来社，1969
- 2) 菅原麻衣子，藍澤宏，井橋朋子(2005)「農山村地域における住民の地域社会に関する知識保有と活用実態—高齢社会型の地域社会における高齢者の役割と参画—」，農村計画論文集，23巻，pp271-276
- 3) 井橋朋子，藍澤宏，菅原麻衣子(2006)「地域社会の価値認識形成における青少年期の経験の重要性」，農村計画学会学術研究発表会要旨集，pp3-4
- 4) 鈴木麻衣子，藍澤宏，梅田美鈴(2002)「行事にみる地域社会の担い手育成の場に関する研究」，日本建築学会計画系論文集，NO.560，pp185-192
- 5) 菅原麻衣子，藍澤宏，篠塚麻衣(2006)「高齢化の進む中山間地域における地域社会機能とその担い手層の特徴—高齢社会型の地域社会形成に関する計画研究その1—」，日本建築学会計画系論文集，NO.600，pp81-88
- 6) 藍澤宏，鈴木麻衣子，斎尾直子「農村地域における個人・世帯・イエの役割分担とその継承方法に関する研究」，日本建築学会計画系論文集，NO.535，pp163-170

Recently, some young people in rural area actively participate in their community and live it up. Thus it is needed that they find the attractiveness of their own living through experience. The purpose of this paper is to show the importance of experience in youth, for raising the value of community. We examine their recognition of which they want to succeed in the future, and grasp its value. In addition, the relation between value and experience is cleared.

In conclusion, it is important to experience the community activities in youth and to play roles of community management corresponding their life stages.